山本正志のシベリア旅行記

「世界遺産バイカル湖とミニシベリア鉄道８日間」

２００４年８月２０～２７日　企画：日本ユーラシア協会京都府連

バイカル湖

ナナイの子どもたちの踊り

シベリア鉄道

２０日

午後２時半過ぎ、全員３３人そろってウラジォストック航空機に搭乗、関西空港を離陸、約２時間たらずでウラジォストック空港に着陸。今回の旅行はまず、ウラジオストック経由イルクーツク⇒バイカル湖⇒イルクーツク市内⇒ハバロフスク⇒シベリア鉄道⇒ウラジオストック⇒帰国、という計画。総勢３３人。団長は長砂実先生（日本ユーラシア協会京都府連会長・関西大学名誉教授）、添乗員はおなじみの金森千鶴子さん。

さてここで国内便イルクーツク行の出発まで３時間以上もある。レストランはあるが予約客で席が確保できない。しかたがないので、１階ロビーで最初の自己紹。それが終ったあと、今回最初の小野理子先生（神戸大学名誉教授）による「シベリアのチェーホフ」の「特別講座」。イルクーツクを経てサハリンにいたるチェーホフの旅は、当時流刑囚のひどい実態を伝え、そのことによって多少は処隅もよくなったともいわれているが、当時からシベリア開発に囚人の労働力が投入され、人権など無縁な過酷なロシアの状況に思いをはせる。最近（２００４年８月）「チェーホフの世界　自由と共苦」の著作が京都・人文書院から出版された。著者は昨年・一昨年ともに旅行に参加された渡辺聡子さん。このなかで、「囚人の島　サハリンへ」の項でチェーホフのサハリン紀行について、諸文献によって詳しく記述しておられるのを読んで、私も理解を深めることが出来た。チェーホフ文学の理解のためにもご一読をおすすめしたい著作である。

さて、今回も出発は８月２０日、私の誕生日。「今日で５８才になりました」と自己紹介。とりあえず、イルクーツク着は真夜中になるのでお祝いは明日の夕食で、ということに。ここで長砂先生（団長）が「ところで８月２０日という日は、トロツキ一が暗殺された日であり、さらにはヒットラーが生まれた日にあたります」という新聞記事を紹介。続いて小野一

郎先生のお話。「ウラジオストック」というロシア語は「ウラジ一」（支配せよ）という語と「ヴォストーク」（かってのソ連の打上げた人工衛星の名だが、ここでは「東方」という意味）が結びついたものできわめて侵略的な意味をもっている名の都市です。もう一つ、ナホトカというのは「見っけもの」といった意味で、太平洋、日本海への出口としての不凍港が手に入ったといったところでしょうか、というお話をされた。他のパック旅行にないわがチームの参加者の顔ぶれは多彩。

ところで空港の前に駐車してある車はほとんどが日本車。それもそこそこの中古車の中にあって目立つのが大型のＲＶ車。明らかに中古車ではない。夕刻、空港の美しい日没を見ながら搭乗、２時間あまりで深夜のイルクーツク空港に着陸。バスでリストビャンカのホテルに着いたのは１２時過ぎ、１階のバーでとりあえずビール（１００ルーブリ：約４００円）を買って部屋へ。

２１ 日

朝食はホテルのレストランで簡単なモーニング。１０時にホテルを出発し、バイカル湖博物館。現地ガイドのターニャさんの説明をききながら世界一きれいなバイカル湖の生態系などの勉強。バイカルアザラシの水槽にはタマちゃんならぬバイちゃん親子がたわむれあって、見ていてあきない。次にリストビャンカの村へ古い教会では土曜日の洗礼で赤ちゃんが何人も順番まち。教会を出てバイカル湖を見下ろす小高い日本人墓地へ。ロシア人墓地の中に石の慰霊碑が。まわりに埋めこまれたコンクリートの四角な墓碑は６０。一同それぞれに持参したお酒や線香をたむけ、祖国をはるか離れて故郷を思いながら無念の死をとげた当時の抑留者の墓前に祈る。有吉さんが詩吟をささげる。

日本人墓地で

バイカル湖

バイカル湖

お昼はホテルバイカルで。バイカル湖特産のオームリ（形はスズキにちょっと似ている）の焼いたのがおいしかった。午後は２時からバイカル湖クルーズタ方５時まで３時間、まったく汚れのない湖面をゆっくりと少し冷たい風にふかれながら気持のいい時をすごす。バイカル湖はまったくゴミも浮かんでおらず、岸辺近くでみると深さ１０m以上もあろうかと思われる水面下の底の石一つ一つまでくっきりとみえ、さすが透明度世界一の湖面ではある。船旅が終ってホテルに帰る途中、「土産」と漢字で書かれた売店のならぶ公園にたちよる。多くの出店の中で目をひくのが湖でとれたオームリの燻製、何しろその場で煙でいぶして売っているのだから匂いだけでも引きつけられる。一尾３０ルーブリ、おいしい。

オームリの燻製→

ターニャさんのお話『バイカル伝説』

昔、湖に父のバイカルと娘のアンガラが暮らしていました。やがて年頃になったアンガラは西に谷に住んでいるエニセイというたくましい若者に恋心を抱くようになりました。ある時ついにアンガラが父に無断でエニセイのもとへ駆けて行こうとしました。これに気づいた父が娘を引きとめようとして大きな石を投げましたが娘はそのままエニセイのところへたどりつきました。湖からは川が流れ出るようになり、バイカルの投げた石はそのまま岩となって川の中に残ったといいます。これがシャーマンの石で、アンガラ川の出発点の川のまん中あたりに少しだけ頭を除かせて見えます。

心配されるバイカル湖の汚染　（「シベリアの至宝バイカル湖」大田憲司）

現在汚染の規模が大きくその被害が深刻になっているのは西南部のバイカリスク・セルロース工場（コンビナート）の廃水による湖水の直接汚染と、煙突から吐出される排ガスによる湖岸の森林や草地への有害な作用である。排ガスは硫黄、窒素などの酸化物を含み、草木を枯らし、降雨と共に湖水に流れ込む。工場の排水口から放流される廃液と共に、湖水中のプランクトンをはじめ微生物やえび、魚類に害を及ぼす。魚やあざらしの体表には、これらの有害作用の結果によるとしか考えられないような、ただれや腫瘍が目立つようになってきた。十年ほど前、バイカリスクの湖岸の水面はあぶくが浮いた茶色味を帯びた水であった。

＜解説＞

２００２年６月の（日本の）国立環境研究所公開シンポジウムでは「バイカル湖－地球環境変動の歴史を映す魔鏡－」と題する高松武次郎氏（国立環境研究所）の報告がされているが、この中で質問に答えて「バイカル湖の主な汚染源は、近くにある２大都市、すなわち、セレンガ川中流域のウランウデ（人口約４０万人）とアンガラ川流域のイルクーツク（人口約６５万人）です。イルクーツクはバイカルの下流にありますが、大気経由の汚染源になっています。また、セレンガ川下流域のセレンジンスクと南湖沿岸のバイカルスクにある２つのパルプ工場も汚染源になっています。これまで湖水、堆積物、湖内の生物などを試料として汚染を調べた報告が幾つかあります。汚染は湖全体に及んでいて、最もきれいな北湖でも、堆積物中には排煙由来の炭素粒子、人為起源の鉛（堆積物中の汚染鉛の量は湖全体で約 4200 トンです）、ＤＤＴ、ＰＣＢ、その他の有機塩素化合物などが検出されています。また湖水やバイカルアザラシなどの生物も有機塩素化合物でかなり汚染さ

れていると言われています。しかし、その程度は日本や欧米の湖に比べればずっと軽度であると言えます。また汚染度は、北湖盆＜中央湖盆＜南湖盆の順で、最も汚染されている南湖のパルプ工場周辺沿岸部では、ローカルな汚染も報告されています。しかし、その汚染も、生物影響無しと報告されています」とのこと。

バイカル湖の水は透明度がきわめて高いがその理由の一つに、みじんこに似たエピシューラという微小動物があげられる。バイカル湖固有種のこの動物プランクトンは、年間十回ほど大量に発生、湖水中の泥やごみを食物として体内にとりこみ、消化してしまう。体長１～２㎜、体重１㎎ほどのエピシューラは、一日およそ２００ml の水のフィルター役を演じており、バイカル湖の水をきれいに保つうえで最大の貢献をしているという。

さてホテルに帰り、６階のレストランで私の５８才の誕生日のお祝いを兼ねた夕食が始ま

った。長砂先生、小野先生御夫妻にかこまれて、まずはシャンパンで乾杯。それから特製のロシアンケーキも出されて一同による「ハッピィバースデイ」の大合唱となり、その場で全員の方のメッセージの書き込まれたバースデイカードをいただく。昨年も一昨年も、旅行の出発は２０日でウズベキスタン航空大韓航空の機長・スタッフのよせ書きのバースデイカードを贈られ感激したが、金森さんが皆さんとこんな心のこもったよせ書きをしてくださっていたことは全く気づかなかった。感謝！

バースデイ・パーティー

さてそこまではいいが、６階レストランの客は私たちだけではなかった。隣のテーブルでワイワイとやっている若者グループの一人がやってきて「オレたちもバースデイパーティだ」といって割りこんできた。きくと２８才の誕生日だという。それから、二つのグループが寄りあって当人たち二人をかこんで何やらロシアの祝い歌を合唱しながら大いに盛りあがっていたが、相手方の当人がダンスの最中にかぶっていた帽子を私の頭に。それではと私もネクタイをはずして彼の首に結んでやる。それからが大変、相手方の一人が（そうとう酔って目がすわっていたが）ウォッカのビンをもってきて何やら「○○×××」。小野先生によると「ウォッカを差し入れしたいが、ここで呑みくらべをやろう」ということのようだ。冗談じゃない！ビール、シャンパンにワインまで相当に入っており、その上ウォッカもすでに入っている。これ以上ウォッカ中ビンなどあけられるはずがない。わずか一口さわっただけで「ハイサヨナラ」と解散宣言。尻尾をまいて退散でこともなし。

明日はホテルを後にしてイルクーツクへ。ホテルの蛇口から出る水の冷たかったこと、井戸水を使用しているに違いない。それにしてもペットボトルの水はバイカル湖の深層水でそのまま飲めるとてもおいしい水だそうだ。

２２日

午前９時４５分ホテル出発、アンガラ川を下ってイルクーツク市内へ向かう。途中まずシベリア木造建築博物館を見学。バスの中でミニ講座・杉本先生のお話があり、長砂先生から去年の旅行に参加し今回も参加の畠山さんの洛陽総合高校での差別と退職金カットの不当労働行為撤回のたたかいについて支援の報告とよびかけがされ、続いて畠山先生から校長・理事長のひどい攻撃に対する怒りの告発がされた。先代から引き継がれた現理事長・校長のひどいワンマンなやり方と組合加入への攻撃、「生徒たちが生き生きと学べる学校にしたい」という畠山先生と仲間の想いに参加者一同「どうしても勝つまでがんばれ！」と応援の声。

イルクーツクに入り、昼食はレストランスネージンカ。ところがメインディッシュがチキンということで、金森さんが「山本さんはビーフでいいですね」と特別メニューいつもいつものご配慮、ありがとうございます。

デカブリスト記念館

昼食の後、次はデカブリスト記念館へ、ここで小野理子先生のミニ講座（写真右）。１８１２年初夏、ナポレオン軍がロシアへ進攻、モスクワへ入る直前ボロジノで両軍は激しい攻防戦を交

える。トルストイの「戦争と平和」にはのちにデカブリストとなってシベリア流刑となったトルベツコイやボルコンスキーも登場する。モスクワを占拠したナポレオンの部隊はやがて冬の寒さに苦しめられ退却。そのフランス軍を追撃してパリまで遠征したロシア軍の皇帝直属の親衛隊（近衛兵）に、のちにデカブリストとなる多くの若手将校が加わっていた。彼らはフランスをはじめ、ヨーロッパ各地の農民がロシアの農民よりもはるかに恵まれた生活をしていることを目の当たりにして、農奴制にもとづく皇帝の絶対専制を廃し、新しい社会をつくろうという動きをおこす。

１８２５年１２月、首都のペテルブルグでデカブリストの乱がおきる。反乱はその日のうちに鎮圧されたが、立憲君主制もしくは共和制への移行を求めた反乱参加者の思い切った行動は、首都のみならずロシア全土に大きな衝撃を与えるできごととなった。反乱を計画し、加わった関係者は反乱をおこした１２月（デカーブリ）にちなんでデカブリストと呼ばれるようになつた。首謀格の５人は絞首刑に処され、これに準ずる主要メンバーおよそ１２０名はシベリア流刑を言い渡され、イルクーツクへ護送された。

反乱を計画実行したメンバーの多くが青年貴族将校であったことから、市民の間には同情気持ちが高まった。首謀者たちの夫人や婚約者は「流刑者とは縁をを切れ、離婚せよ」という圧力をはね返してイルクーツクにやってくる。そうしたすばらしい女性たちの生活と交流の場となったダイニングルームやピアノのおかれた部屋もあり、当時が偲ばれる。

デカブリストたちが晩年に至るまでの数十年間、イルクーツクはロシア史のなかで国民の関心を惹き付ける町となつた。

１９５０年に出版された「デカブリストの妻－ロシアの婦人」（ネクラーソフ）には感動的な長編叙事詩「公爵夫人トゥルベツカーヤ」と「公爵夫人ヴォルコーンスカヤ」がおさめられている。（岩波文庫絶版）

デカブリスト広場で自由散策、広場ではブリヤートの衣装で着飾った人達が歌い踊り、そのまわりを多ぜいの人達がとり囲んですごくにぎやか。アンガラホテルのレストランで夕食。

ターニャさんの話　彼女は２００２年から翌年にかけてに来日しているが、日本は寒いという。イルクーツクの冬はマイナス２０度位になるが、日本の冬は１０度でも寒い。イルクーツクでは風邪はひかなかったが、日本ではずっと風邪をひいていた。まず家のつくりが風がスイスイ通って温まらない。次に食べものが油っこくない、冷たい(熱いスープなどもない)。食べものと体質が合わないせいではないかという。

２３日

朝食の後ホテルのインターネットセンターで日本のニュース検索。オリンピックのメダル

獲得や高校野球で駒大苫小牧の優勝を知る。政治ニュースでは大きな事件はなし。奄美大島名瀬市会議員選挙で左京生活相談所長をつとめた三島照さんの当選を知る。万才！

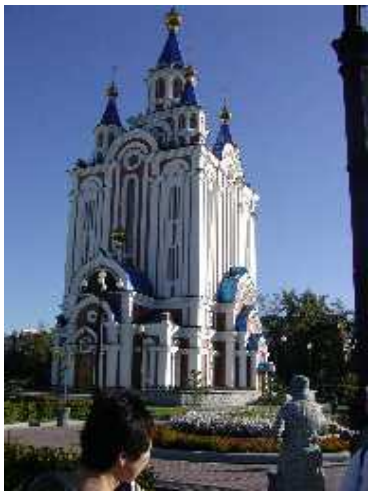
午前中は自由時間、街の中をブラつくが、ホテルに帰って聞くと金森さんが災難だったという。お金の両替の時一万円札を引きかえた後、「お前のはニセ札かも知れない」といってもう一枚別のお札をもっていってそのままドロン？「２５年間旅行をしてきたがこんなことは初めて。油断もスキもない」といきまくことしきり。そのことを聞いたターニャさんは「私の国の人がこんなことをして恥ずかしい。許せない」とすごく憤慨していたという。

バスでイルクーツク空港へ、ここでターニャさんとはお別れ。ロシアの国内便は自由席。最後の方になったが何とか空いた席を確保。後の席に金森さん、肩をトントンとされふりむくと小さめのおにぎりが二コ。夕べ部屋でごはんを炊いてにぎってくれたという。おいしかった。やがて飛行機はハバロフスクへ着陸態勢に入り、下降。窓からみるアムール川はどこまでが川でどこからが岸辺なのかわからない。曲がりくねった川筋があちらにもこちらにも、今は水量が少ないのかもしれないが、とにかくゴルフ場が何百でも作れそうな緑の中洲？が延々と続く。やがて農地と点々とする民家がまばらに目に付くようになってやっと滑走路に着陸。

アムール川

ホテルにつく前に、途中にある日本人墓地によって墓参。つい二日前に中川経産大臣がきて捧げた花輪があった。ハバロフスクの町の雰囲気はイルクーツクと違って建物も車も、歩いている人の様相もアカ抜けていて明るい、というのが第一印象。インツーリストホテルで夕食。その後少し風の吹く中を川辺の公園を散歩。公園のあちこちの売店（軽食レストラン）では若者たちがにぎやかに飲みながら夜中までワイワイやっていた。

２４日



朝の食事はホテル１１階の「ユニハブ」、焼き鮭と味噌汁にご飯（久しぶりに日本のお米）。この日はハバロフスク市内観光。ガイドは男性のゴーシャさん。まずは最近（３年前）再建されたロシア正教の教会へ。(写真右)　中では礼拝が行われているところ。外観はくらいに見えるが内部はすごく高い天井まで壁画が描かれ、吹き抜け、アカペラの男女コーラスのさえ渡る中で数人の信者たちとともに荘厳な気分に。教会を出てからコムソモール広場、、郊外のザイムカ・ブルスニン（別荘･遊園地などの複合施設）へ。ここはお金持ちの豪華な別荘や、数日間あるいは日帰りの休日を楽しむ親子連れなど、あちこちにテニス、ゴルフ、レストランなどの施設があり、なんと檻の中にヒグマ２頭も。ゴーシャさんが持ってきたコンデンスミルク缶をさし出すと

「ありがとう」というしぐさで両手でうけとり、さっそく鋭い爪と牙で側面に孔をあけて仰向けになって「うまい、うまい」と数分でたいらげてしまった。昼食はその中のアムール川辺りのレストランでポークのバーベキュー。市内にもどって、アムール川クルーズ。アンガラ

川と違って川の水は実りを約束する養分を含んだ濁った黄色。クルーズの後、バルティカビール工場見学で、最後はビールの試飲。（工場は撮影禁止）６種類以上のビールが用意されており、帰りには１、５㍑のペットボトルのビールを「おもち帰り下さい」とのこと。みんなが「山本さんに」とビールが３本も。いくらなんでも４．５㍑ものビールは無理。バスの運転手さんに飲んでもらうことにしてプレゼント。

クルーズ船

今日の最後はハバロフスク市民のダーチャ（別荘）訪問。「あまり広くありません」といいながら６００㎡、手作り（ほとんどのダーチャがそうだが）の居室、サウナ部屋、鶏小屋、畑にはトマト、ピーマン、ナス、ジャガイモ、スモモ、西洋ナシ、キャベツ... 週３日くらい通っているそうだが、手入れはゆきとどいている様子。この方の本業はパン工場の経営、一番うまいパンを焼いていると言っていた。夕食はレストラン・ルースキー。民族衣装の歌手がロシア民謡、日本の歌謡曲、ロシアポップスなどで歓迎の宴。

ロシア軍艦

ハバロフスクは国境の町、アムール川（中国名「黒竜江」）の対岸は中国。といっても、とにかく川幅が広く、春には凍結していた川面が解けた水で上昇し、流れは平面を自由につくり変える。飛行機から見たとき、広い平野部のどこからどこまでが川なのか、流れが変わったことによって取り残された湖沼なのか、農地なのか、原野なのかわからない。川の中州は中国領なのかロシア領なのか、その広さだけでも小豆島くらいはあるのではなかろうか。ロシアと中国の間で国境紛争になった歴史もあり、今でも微妙。そういえばアムール川を行き交う材木や砂などを満載した大型船も遊覧船もすべてロシア国旗をかかげ、川の中ほどには小型のロシア軍艦もいた。

２５日

今日はハバロフスク市内観光、夜はシベリア鉄道。午前中は原住民ナナイ人（小数民族）の村シカチ・アリャンヘで古代遺跡見学と民族楽器でのコンサートと踊り。

約１４０００年前につくられた住居、岩に刻まれた人面・こどもたちと７５才のおばあさんの歌と踊りの演奏。みていると日本人と変わらない顔だち。悪魔退散の太鼓と腰につけた鈴（悪魔は大きな音がきらい）「やってみませんか」といわれて小森夫人が挑戦。子どもたちの踊りは素朴でシベリアの大地に根を張った原住民の生活から紡ぎだされたもの、胸を打たれた。娘への土産にときれいな飾りの小物入れをビデオカメラ用にと買う。

川辺の大岩に彫刻された人面は測定によると１４０００年前のもの。この村の史料館で昼食。ハバロフスク市内に帰って、百貨店に立ち寄る。

夕食の後、ハバロフスク駅へ。シベリア鉄道に乗車。部屋は金森さんと西村さん、どうやら他の乗客はなく、コンパートメントは３人だけ。「ウラジオストックからモスクワまで９８００km を一週間かけて夢の旅」とは言うが、思いのほか室内は狭く、スーツケースも入りきらずそのまま床に、少し窮屈な状況。１５号車は大半がわが部隊なのであちこちの部屋を訪問したり、１等車の８号車を訪問したりしながら、やがて大草原の日没。真っ赤に照らされた西の地平線に太陽が沈む数分のすばらしい眺めに大満足しつつ、やがて真っ暗闇の中を

ひた走る。話し疲れ、呑み疲れて上段の狭いベッドに。起こされた記憶はないが、ゴトンゴトンときしむ音、確か途中で４、５ヵ所停車したが、はっきりとしない。

シベリア鉄道の夜明け

２６日

午前前７時シベリア鉄道オーシャン号はウラジオストック駅に到着、まだ、薄暗いホームにおり立ち、ねむい目をこすりながらとりあえずホテル・ウラジオストックへ。しかしチェックインは夕方なので汗をふきとることもできず、レストランでコーヒーと簡単な朝食。そのまま市内観光。

ウラジオストックは坂の町。走っている車はほぼ１００％日本車、右ハンドルばかりの車だけならいっそのこと左側通行にしてしまったら安全の上でもいいのにと思うが、その上に大通りにはほとんど信号がない。だから大型バスの左折の場合など車の流れを見はからってつっこむしかない。歩行者は堂々と横断し車は一応とまってくれるが、事故がおきない方がおかしい。

５６潜水艦

５６潜水艦が広場におかれているが大きい！内部が展示ルームとして公開されている。せまい艦内はハッチで区切られており、人一人が体をくねらせ身をかがめてやっと通りぬけができる程度。一室が攻撃で浸水したとしても沈没しないようにハッチは厚くしっかりとつくられている。艦長室には伝声管や潜望鏡もそのまま。船首には４発の魚雷発射管があり、実戦体制そのまま。続いて要塞博物館へ。大砲や高射砲、速射砲など、ジエット推進のロケット弾もあり、１２時丁度には大砲の砲撃がされることになっているので、多くの中国人観光客とともにビデオカメラをかまえて待つ。兵士が発射の姿勢をとり、ドカーンと肝をつぶすようなすごい大音響。

船上レストランで昼食、しかし　やはりシベリア鉄道の昨夜はかなりの寝不足、ねむいのと少々のつかれ。次は金角湾クルーズ。水面はゴミやペットボトルなど汚れているが湾内の海水は瀬戸内海のようには流れず、留まったままになるのでなかなかきれいにはならないのだろう。

船や観光船にまじって軍艦も停泊、修理中なのだろうか、あれならだれでも小舟で近づける。百貨店によってホテルにチェックイン。小一時間休んで、とりあえずシャワーをして、最後の夕食へ。ジプシーのショーの後、夜１０時前ホテルへ。いよいよ明日は帰国。

２７日

いよいよ帰国、空港までの途中、自由市場に、数百の大型コンテナを並べた広い市場には文字通り「何でもあり」。中心は中国系の商人。出国手続きをへて機内に。関西空港につくとやはり「日本は暑い」。自宅での最初は冷やしソーメン。みなさん、ありがとうございました。来年はキエフとクリミヤ半島の予定です。

アムール川の船上で

ハバロイフスク郷土史博物館で

ホテルバイカルで